

以上につき精細に検討した結果、個々の成績の解釈につき、いさゝか知見を得たので報告する。

14. オキシグラフによる小児心肺機能の研究 (予報)

(第一生理) 草地良作

○小泉とし

皮下組織における酸素分圧は 1) 局所における酸素消費と、2) 局所への酸素供給即ち血流量及び血流酸素分圧とによつて決定される。後者は血管収縮機能及び心肺機能と密接な関係を有する。従つて皮下酸素分圧の測定は血管収縮機能或は心肺機能検索の手段となり得る。この様な観点から、小児心肺機能検索への応用の前段階として、家兎及び正常成人につき、オキシグラフによる皮下又は皮内酸素変動測定の基礎的検討を行った。

1) 白金電極を皮下に挿入した直後よりの電流を測定すると、家兎では約 10 分後まで電流は漸次減少した後、定常状態に達した。このような減少は人の皮内では極めて少い。

2) 家兎にリンゲル液を静注すると、皮下酸素は一過性の増加を示すが、これは血管反応に起因すると考えられる。

3) 家兎にアドレナリン 0.3 mg/kg を静注すると、皮下酸素はリンゲル液静注時と同様な一過性の増加を示した後、漸次減少した。

4) 家兎にブリスコール 0.5 mg/kg を静注すると、皮下酸素はリンゲル液静注時と同様な一過性の増加を示した後、漸次増加した。

5) 家兎にペントバルビタール 50 mg/kg を静注すると、皮下酸素はリンゲル液静注時と同様な一過性の増加を示すが、その後の麻酔による減少は認められなかつた。

6) 家兎及び人において酸素吸入を行うと、吸入開始後、時間遅れ極めて少く、皮下又は皮内酸素は急速かつ著明に増加し、吸入終了とともに急速に正常値に復した。

15. 後天性心疾患の術後遠隔成績について

(外科) ○山本 勲, 林 久恵, 坪井 重雄
石原 昭, 蛭名 勝仁, 別府 俊男
山口 繁, 金本 栄沢, 伊野 照子
都筑 康夫, 堺 裕, 山中 爾郎
倉光 秀麿, 佐藤 礼介, 乃木 道男
豊泉 稔, 五味 春人, 斉藤 洋子

私達の教室に於て昭和 26 年 5 月に、ポタロー氏管開存症の結紮手術の本邦第一例が行われてから、昭和 35 年 9 月に至る 9 年余に心研で行われた心臓疾患の手術症例数は、2108 例に及ぶ。

この内、後天性心臓疾患手術症例数は、昭和 27 年 7 月に僧帽弁狭窄症の交連切開術が行われ、本邦に於ける成功第一例として報告して以来、総数 1188 例になる。

僧帽弁狭窄症がこのうち最も多数を占め、894 例になるが、その手術死亡率は 6.9% で、死因は肺水腫、脳栓

塞等が主なものであつたが、最近は少なくなつている。術後患者は手術後 2 週間で早くも自覚症状の軽快を自覚するが、退院後の遠隔成績に於ても、臨床度、エルゴメータ、レ線写真、心電図、等の諸検査にて非常に軽快している。

又、僧帽弁閉鎖不全症、大動脈弁狭窄症、大動脈弁狭窄兼僧帽弁狭窄症、収縮性心膜症、その他についてもその遠隔成績を述べる。

16. 子宮内外同時妊娠の一例

(産婦) 遠藤 雅子

私共の教室に於いて、最近子宮内外同時妊娠の一例を経験したので、報告する。

[症例]

患者は 24 才、未産婦にて、既往歴に特記すべき事なきも、21 才と 22 才の時妊娠 2 ヶ月にて人工妊娠中絶を受けている。結婚は 20 才、初潮到来 15 才以来順調で 30 日型、持続 3 日間、量中等度にて凝血(+), 月経障害なし。

現症歴：最終月経は昭和 35 年 5 月 13 日から 3 日間、特別悪阻症状なし。5 月 26 日少量の不正性器出血あり。5 月 27 日午後 3 時頃下腹部に激痛を感じ、某医にて子宮外妊娠と云われ当科を紹介された。

初診時所見：初診日は昭和 35 年 7 月 27 日、体格栄養中等度、顔面蒼白、脉搏整調、血圧 110~58 mmHg、下腹部やゝ膨大し左下腹部に抵抗及び圧痛あり、子宮は前傾前屈、超鶯卵大、右側付属器は異常なく、左側付属器に軽度の圧痛を認む。ダグラス氏窩穿刺にて流動血を証明す。

手術時所見：昭和 35 年 7 月 27 日開腹手術施行。腹腔に約 200 cc の出血を認め、左側卵管狭部に 3 cm × 4 cm の血腫あり、中央部に 0.5 cm × 2 cm の不完全裂口を認む。子宮は前傾前屈にて 6.7 cm × 7.5 cm 運動性あり。又、右側卵巣に著明な黄味を認めた。型の如く、左側卵管剥出し、手術終了。

術後経過：術後直ちに黄体ホルモンを筋注、安静にして経過観察するに、性器出血もなく子宮も漸次増大し、術後 14 日目の早期尿で施行せるスリードマン反応は陽性にて、術後 16 日目に全治退院。目下経過観察中なり。尚、剔出標本の病理組織学的検査により、血腫内に絨毛組織のみならず、胎芽迄証明された。

17. 興味ある経過をとつた破壊性胎状奇胎の一例

(産婦) 小野 和江

症例 26 才未産婦

性器不正出血及び下腹部緊張感を主訴として某医により、流産の診断を受け掻爬を受け胎状奇胎の診断を受ける。その後も出血は続き、某医により再び掻爬を受ける。初回の掻爬より約 20 日後当科外来を訪れ、直ちに入院三回目の掻爬を受行、摘出物は病理組織学的に胎状奇胎